

異常気象というものには二種類あつて、それは客観的な異常気象と主観的な異常気象だ。もちろん、客観的と言っても、誰かが「異常だ」と判断しているのには違ひないのだから、どうしたつて主観からは逃れられないのかもしれない。しかし、ここで言う主観的な異常気象というのは、要するに、平均的な天候よりも暑かつたり寒かつたり長雨だつたりするのが単に気に食わないという話にすぎない。つまり、干ばつだの氾濫だのといった物騒な事柄とは程遠いながらも、パニックに陥つた際の一種恍惚とした感覚からも程遠い、神経を紙やすりで削られていくような不快感を催すものだ、と言える。しかし考えてみれば、統計的に作成された「平均的な天候」なるものにも実際の天候がピッタリ沿うことなど、果たしてあるんだらうか。してみると、異常気象なるものはまったくの幻であつて、地球そのものに文句を言うわけにもいかない私たちが、「まったく異常のやつめ」と愚痴るためだけに存在しているのかもしれない。

そのようなことをつらつらと考えながら、私は里の中通を干し芋のように歩いてた。もちろん干し芋は歩かないけれど、気分的に干し芋のような心持ちだったので、おおよそそのように表現しても差し支えないと思う。世の中の物事について、よく「程度の問題じ

やない」と意見をつける人がいるが、馬鹿を言うんじゃない」と私は思う。世の中の物事なんて、大抵は程度の問題なのだ。その証拠に見てみるといい、肌突き刺さる恵みの陽光は、里の家々をまるで芝居の書割めいた白々しさに染め上げ、明らかに普段より少ない道行く人々の口を、一様に呼吸困難な魚のごとくパクパクと開けさせているじゃないか。

もう今日は行くのをやめて明日にしてしまおうか、とも思つたけれど、しかし通りがかりに横目で見やつた龍神様の像は明日も今日とそう変わらないだろうことを告げていて、私の肩を一層としぼませる。普段は涼やかな光沢を見せるその石像も、今は上に卵を落としたらまず間違いなく目玉焼きにできるだろうと思われ、心などないはずの龍神様も、心なしか（まあまあうまいこと言つたか）ぐつたりしているように見えた。あるいはそれは、その白く静かな光をたたえる瞳を通して、私自身の心持ちを反射しているから、なのだろうか。実際私はぐつたりしていた。よもやこの距離で必要もないだろうと、水筒の一つも持つてこなかった自分の愚かさが恨めしい。むしろ気色が悪いとすら感じるぬるい微風が力なくはためかせた眼前のノボリには、宇治金時と墨痕淋漓に大書してあつた。そりゃあ、これだけ水分が恋しい日には、でっかく主張もしたくな

るといふものだろう。何でも聞いた話によると、物といふのは大きければ大きいほど、ほかの物を引き付ける力が働くのだという。その引力の法則にしたがって宇治金時へ危うく囚われかけた私はしかし、今月のお小遣いは既に底を尽きかけているということを思い出した。何もかも異常気象が悪いのだ。ついでに私が日々あれだけ売り上げに貢献してあげたというのだから、甘味屋も少しは値引きしてくれて良かったんじゃないだろうか。そして何より、当主であるはずの私になぜお小遣いなどという屈辱的な制度に甘んじなければならぬのか。

怒るのはよくないと分かっていた。それは何も貪瞋痴というような抹香臭いお題目によるものではなく、単純に怒ると体温が上がるからだ。そしてそれはそのまま体力の消耗に繋がった。しかしそうして無理にでもエネルギーを作り出さないと、とても目的地まで気力が保たないだろうというのも事実であり、言うなれば私の私による体力と気力のチキンレースと言えた。途中で体力チームが敗れたら、誰か助けてくれるだろうか。普通には死ねそうにない私とはいえ、熱中症で死んだとなるときすがに先代先々代及びそれ以前の私に申し開きの立ちそうもない。では、なぜ私が熱中症などで死ななければならぬのか。その理由は

十二分に承知していた。直接的には異常気象のせいであり、間接的にはあの人が素直に喋ってくれないからなのだ。つまり、あの人が私を殺したといつても過言ではない。あの、常に底の見えない笑みをたたえていて、出不精だから話を聞くのも一苦勞、姫らしいが何の姫なのかは分からない、そして、まあ、とんでもない美人の……あの人だ。

間一髪で体力チームは瓦解を免れ、目的地であるこの人の家へ到着できたことに私は安堵の息を漏らす。漆喰に塗り固められた見事な白壁は、今日に限ってはただ日光を反射してまぶしいだけだった。私は「頼もう！」と声を張りつつ引き戸を開け……ようとし、さすがにそれは無いだろうと思ひ直して一呼吸ついた。問題はあの人であって、この人ではないのだ。いきなりケンカ腰で来られても困るに違いない。よし、私は冷静。稗田阿求は常に淑女です。

「ごめんください、慧音さ——」

「暑く苦しいのよあなたの能力は！ この暑いのに！ というかあなた自身が暑苦しいから早く帰って竹炭でも焼いてなさいよ！」

「あ!? 別に呼ばれて来ているわけでもないのに態度でかいわね！ 暑いならあんたがとっとと帰って兎鍋でも作ってればいいんじゃないの!？」